講演題目：コモンズとしての環境と平和

講演概要

多くの犠牲者を出したCOVID-19パンデミックは収束を迎えましたが、その一方で、コロナ禍以前から存在していた人類存亡に関わる深刻な問題が改めて浮き彫りになっています。一つは、国連のグテーレス事務総長が昨年 7 月の会見で「地球沸騰」と称した地球温暖化の加速です。もう一つは、現在進行中のロシア・ウクライナ戦争とパレスチナ・イスラエル戦争が長期化によって現実味を帯びつつある核戦争の脅威です。今年 1 月に発表された「終末時計」の針が残り 90 秒を指したままであることは、事態の深刻さを象徴しています。果たして私たちは、未来の世代に生存可能な環境を残すことができるのでしょうか。

地球温暖化対策が人類の行く末を左右する喫緊の課題であることは、G7 サミットや COP などの国際会議において繰り返し強調され、広く報じられています。しかし、この危機感が人々の間で十分に共有されているとは言い難いのが現状です。この状況を理解するには、地球環境の悪化がいつ、なぜ、どのようにして進行してきたのかを再確認する必要があります。

今回の講演では、見田宗介の『現代社会の理論』（岩波新書）を参照し、20 世紀後半における環境・公害問題や資源・エネルギー問題が近代の産業資本主義の展開の中でどのように発生し、それが南北間の貧困格差をどのようにもたらしたのかを探ります。また、ナオミ・クラインが「惨事便乗型資本主義」と呼ぶ大災害後の開発事業を事例に取り上げ、環境を「開発すべき資源」として捉える考え方と、環境を「共有すべきコモンズ」として受け入れる姿勢の違いについて、オーストリアの思想家イヴァン・イリイチの議論を手がかりに考察します。

最後に、コモンズをめぐる議論をイリイチのもう一つの重要な概念である「民衆の平和」と結びつけ、環境問題と平和研究を架橋する新たな視点を提示します。この議論を通じて、持続可能な未来に向けた可能性を皆様とともに模索していきます。